



よずみちゃん

季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第24号

(2017年1月)

★ギャラリィ展

はそう — 須恵器の

「前方後円墳」?!

1月11日(水)～3月20日(月・祝)

【入場無料】

古墳時代に使われた焼き物の一つに須恵器があります。灰色の硬い土器で、蓋杯や高杯、壺など多くの器種があります。今回はそのうちの「臚」をとり上げます。

瓦へんに泉(国字)と書いて「はそう」。耳慣れない名称でしょう。「臚」は「はそう」とも、「はんぞう」とも読みます。「はんぞう」は液体を注ぐ器で、その漢字は「半挿」。注ぎ口ともなる管状の柄が器本体に半ば挿し込まれているさまからの命名です。「はんぞう」は平安時代の物語にも登場する古い名詞です。

さて、須恵器の「はそう」は丸い胴にラッパのような口が付く容器です。ひっくり返すと「前方後円墳」みたいです。胴の真ん中には孔があきます。それじゃダダ漏れ? いえいえ、ここに竹などの管をさし込んで液体を注ぐための器です。漢字に「泉」が付くのもその辺に因るのでしょう。



須恵器「はそう」

(花谷 浩)

「はそう」には紋様がつけてあります。胴には斜めの筋が並び(列点紋)、口には波状の紋様がめぐるのが五世紀からの基本形です。六世紀後半の出雲の「はそう」はこのパターンを踏襲します。同じ時期の石見の「はそう」は、口の部分の波状紋が上下二段に付くことがあるのと、胴の列点紋がちよつと上にあるのが特徴です。これがわかると出雲と石見の「はそう」が区別できます。隠岐では石見の「はそう」は出土しますが、出雲のものは未発見。ほかに紋様をまったくもない「はそう」も見つかります。これはどうやら伯耆の「はそう」のようです。

「はそう」から古墳時代の物流が見えてきそうです。

★企画展

出雲を掘る〜第六話

— 出雲郡漆治郷の今昔 —

みどころ紹介

三井Ⅱ遺跡瓦窯跡(市内斐川町直江)は、市内唯一の古代瓦の窯跡です。出土した軒丸瓦は、蓮華(ハス)の紋様を表現しますが、その紋様板は下のところが尖っています。同じ形は広島県三次市などでも発見されていない珍しいものです。しかも、三次市寺町廃寺の軒丸瓦とは紋様を作出した木型(範)が同一です。寺町廃寺の瓦を作った瓦職人が道具を携え山越えしてきたことがわかります。

窯跡からは「鴟尾」という大型の瓦製品も出土しました。瓦屋根の大棟の両端にのせた飾り瓦です。そして、これまた三次市の寺跡のものとデザインが瓜二つ。三次の職人が手がけた作品とみてまちがいありません。一三〇〇年前、瓦作りの職人はどこを通過して出雲へと来たのでしょうか。

寺院を建てるにはさまざまな技術者が必要でした。古代出雲の人たちがどこからそれを導入したのか。「瓦礫」はそれを雄弁に語ってくれるのです。

(花谷 浩)

★特集 研究ノート⑰ 企画展
弥生時代の
ガラス玉が語るもの

現在開催中の企画展「出雲を掘る 第6話」では、斐川町所在の杉沢遺跡群(杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群)の調査成果をもとに展示を行っています。展示室でトップバッターを務めるのが、今回ご紹介する青いガラス製の小玉です(写真)。杉沢Ⅱ遺跡で見つかったガラス玉は、直径4〜5mmの小玉6点。弥生時代中期後葉(約2000年前)の竪穴建物跡から出土し、島根県内で最も古いガラス玉となりました。



杉沢Ⅱ遺跡のガラス小玉

弥生時代、人々は美しく輝く玉を装身具に仕立て、身にまといました。玉の材料には、碧玉、ヒスイなどの石材やガラス、琥珀などが

ありますが、空や海の色にも似た青色はガラスだけがもつ特徴です。日本列島の弥生時代遺跡からは、5万点を超えるガラス玉が出土しています。これは東アジアでも抜きん出た出土量を誇り、弥生人がいかにガラス玉を好んでいたかが分かります。

古代のガラスは、原材料であるケイ酸と溶融温度を下げるための材料(植物灰やカリ硝石、鉛など)、そして着色材でできています。1200℃を超える高温の炉で溶かされたガラスは、青色や緑色などに彩られた後、玉へと加工されました。列島内の弥生時代遺跡では、青銅器生産のための炉(800℃程度)は確認されていますが、この炉では一からガラス素材を生み出すことはできず、一度製品となり融点が下がったガラスを溶かすことしかできません。そのため、弥生時代の日本列島に存在していたガラス製品は、元をたどれば全て列島外からの輸入品なのです。当時の輸入品は貴重品でしたから、ガラス玉は誰もが持てる品物ではなく、限られた有力者、有力集団のみが持ち得た品物だったといえます。

では、当時のガラス製作地はどこか。これについては、科学的な成分分析にもとづく研究が進んでいます。先述したように、ガラス素材には溶融材が混ぜられますが、この溶融材の種類と着色材、製作技法の組み合わせに、製作地の違いが反映されています。例えば杉沢Ⅱ遺跡の小玉は、カリ硝石を溶融材とするカリガラス製。コバルトにより濃い青色に着色され、引き伸ばし法という方法で作られました。これらの特徴をもつたガラス玉の製作地は、東南アジアから中国南部の一带に限定されます。つまり、島根県最古のガラス玉は、東南アジアから海を渡り、はるばる出雲へやってきた可能性が高いのです。

とはいっても、杉沢ムラの弥生人達が製作地から直接輸入していたわけではなく、列島内のどこかに仲介する地域があったと考えられています。ガラス玉が日本列島にもたらされるのは、弥生時代前期末のことです。この頃、ガラス玉は九州北部地域に限られ、中国大陸や朝鮮半島から直接輸入されました。その後、中期後半には九州地方より東の地域でも少しずつ

ガラス玉が出土するようになりませんが、その供給源となったのは九州北部と考えられます。さらに、大量のガラス玉が出土し始める後期になると、突出した集中を見せる近畿北部(兵庫県・京都府の日本海側)が、九州北部とともに供給源として発達しました。面白いことに、この2大供給源で出土するガラス玉には色の違いがあり、九州北部は淡青色と濃青色の割合が半々であるのに対し、近畿北部ではほぼ淡青色に限られます。ガラス玉の入手経路を明らかにするのは簡単ではありませんが、濃淡の異なる青色がその鍵を握っているのかもしれない。

杉沢Ⅱ遺跡の話に戻ると、小玉6点は全て濃青色。色からは九州北部からの入手が想定されます。これを裏付けるものには同遺跡で出土した九州型と呼ばれる石のおもりや、同時期の出雲平野で点々と見つかる九州北部の土器があり、出雲と九州の交流がうかがえます。小さなガラス玉ですが、その存在からは九州、ひいては東アジア全体を舞台とした壮大な交流を読み取ることができるのです。

(景山このみ)

★戦前に建てられた民家の調査
出雲に残る茅葺き屋根の今

第23号で、文化財保護政策のマスタープランとなる『出雲市歴史文化基本構想』策定にともなう神社境内の石造物調査を紹介したところですが、今回は民家に関する調査についてお伝えします。

民家は、私たちの生活に欠かすことのできない建物です。そのため、時代や地域によって異なる様々な特徴を示します。この調査では、民家から見た出雲市の歴史や特徴を把握するため、太平洋戦争以前（江戸～昭和初期）に建てられた民家のうち、約450軒を対象としました。

調査の中で明らかになったことのひとつに、屋根仕上げの違いがあります。屋根仕上げには、大きく瓦葺きと茅葺きがあり、瓦葺きに使用された瓦は黒瓦・赤瓦のほか、江戸時代以降、地元大津や秋鹿（松江市）で生産された左棧瓦（ひだりさんか）があります。出雲市内では、斐伊川あたりを境に、東に黒瓦が、西に赤瓦が多く使われていることが分かりました。

また茅葺き屋根は、その名の通り河原などに生える茅や稲刈り

後のわらを利用して葺き上げたもので、その構造は古代の竪穴住居とも共通する、伝統的な屋根仕上げです。厚く茅を重ねることで外

気の影響を受けにくくなるため、茅葺き屋根の家に住む方は、夏は涼しく、冬は暖かいと太鼓判を押されます。ただその一方で、屋根の材料となる茅、それを葺き上げる職人が減少の一途をたどり、住民の高齢化も相まって、維持や補修に手間のかかる茅葺きから瓦に葺き替える民家が増えていきます。

現在、市内には50軒前後の茅葺き屋根が残っています。出雲の農村景観を代表する茅葺き屋根をこの先も残し続けられるよう、継続的に調査を進めていきます。

（景山このみ）



茅葺き屋根の民家

★速報展

「ふるさとの記録を守る」
古文書を未来へ伝えるために

1月25日(水)～4月10日(月)

私たちが暮らす地域にある、「文化的な資源や宝」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。寺社・古墳・伝統行事といったイメージが多いかもしれませんが、そんな中、今回の速報展は、古文書を主役にします。

昔の人は、家や商売に関すること、地域の祭りや年中行事などと、日常の様々なことを書き残してきました。今のように写真やビデオがないので、次世代に「記録」として伝えようとしたのです。

もともと、昔の人が書いた字は、ミミズが這ったようなくずし字なので、簡単には読めません。また、虫食いや劣化によって紙が傷み、汚れた古い紙に見えてしまう場合もあります。

しかし、そうした古文書も、今ではふるさとのあゆみを知る貴重な手がかり、いわば「ふるさとの記録」である、と言えます。

例えば当館で整理している、大社町のある家に受け継がれてきた文書の事例を紹介します。この



タンスに収納されていた古文書

文書の中で、扁額の下張りとしてリサイクルされた古文書は、明治時代に多伎町の廻船業者が行っていた商売の帳簿であることが判明しました。大坂の業者名がみえることから、広く商売を行っていたことがうかがえます。

ところで近年、古文書は危機的な状況に直面しています。都市部への引っ越しや家の建て替えなどの際に、いらぬものとして処分され、急速に失われているという現実があるためです。

今回の速報展は、こうした危機から古文書を守り、なおかつ古文書の魅力を知っていただくために企画しました。

これら地域の財産を受け継ぎ、次世代に伝えていくことが重要です。そのために、私たちに何ができるかを探っていきます。

（中山玄貴）

★講座のご案内

▼館長講座

1月14日(土)

「考古学と戦争」

【講師】渡邊貞幸 (当館館長)

▼文化財保護審議会委員講座

「文化財のプロが

出雲の歴史を語る」

2月4日(土)

「神仏習合と出雲市の文化財」

【講師】梶谷亮治氏

(奈良国立博物館名誉館員)

2月25日(土)

「高瀬川水運と荒木川方役所」

【講師】多久田友秀氏

(島根県近世史研究会会員)

3月11日(土)

「出雲大社の『神仏隔離』と

『神仏分離』」

【講師】井上寛司氏

(島根大学名誉教授)

右の講座はいずれも

●時間 14時～16時

●会場 たいけん学習室

●受講料 300円 ●定員 80名

訂正とお詫び

「博物館だより第23号」1ページ、2段目において写真の説明と本文のふりがなにそれぞれ誤りがありました。次のおり訂正し、お詫びいたします。
写真の説明(一正) 杉沢II遺跡から仏経山を望む
本文のふりがな(一正) しつちのさと
(誤) しつぬのさと

★博物館アテンドコーナー
「家族みんなで楽しめる博物館」

こんにちは

博物館のアテンドです。

博物館では、展示以外でも楽しんでいただけるよう、遊びながら

考古体験できる場所があります。

発掘体験ができる、発掘プール

にはプラスチック製の砂の中に、

剣などのお宝が

埋まっています。

土器片などを見

つける喜びや感

動が体験できま

す。

土器パズルは、

土器片を合わせていくと、弥生時

代の土器が完成し、まるで復元作

業をしているかのようです。

子どもたちの一番人気!! 「かく

れキャラクター探し」。博物館一

階に、かくれた

キャラクターた

ちを探す遊びで

す。全問正解で

アテンド手

作りの品をプレ

ゼント。季節ご

とのプレゼントは、大人にも大好

評です。



★館長コラム②⑩



20世紀を代表するカリスマ的指

揮者の一人フルトヴェングラー

は、今でも熱狂的なファンが絶え

ません。学生時代、友人に信奉者

がいて、たびたび家に呼ばれレ

コードを聴き比べて、熱い「フル

ヴェン」論を聞かされました。お

蔭で私は、レコードを何枚も買っ

てしまいました。

この大指揮者ヴィルヘルム・フ

ルトヴェングラーは、実は父親も

息子も考古学者です。

父のアドルフ・フルトヴェン

グラーは19世紀後葉に活躍した著

名な考古学者です。かのシュリー

マンが実施したオリンピアの発掘

にも参加しています。ギリシャ陶

器などの分類や編年で大きな業績

を挙げ、「古典考古学におけるリ

ンネ」と呼んだ人もいます。

彼は弟子の考古学者を息子ヴィ

ルヘルムの家庭教師にしました

が、息子は(親と家庭教師の期待

に反して?)音楽の才能を発揮し

偉大な指揮者になりました。でも、

さらにその息子のアンドレアス・

フルトヴェングラーは、祖父と同

じ古典考古学者になりました。

ところで、大指揮者フルトヴェ

ングラーは大戦中、ナチスに一定

の抵抗はしつつもドイツにぎりぎ

りまでとどまって、客観的にはナ

チスの広告塔の役割を果たしまし

た。彼はいわば無自覚なナチス協

力者だったわけで、音楽家仲間か

ら厳しい批判を受けました。

先の戦争では、それぞれの国で

多くの文化人が戦争遂行のために

動員されました。文化人のもつ影

響力を時の権力は見逃さないから

です。そのときどう生きるか。む

ずかしい問題です。(渡邊貞幸)

(発行) 出雲弥生の森博物館 2017年1月

〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760

(TEL)0853-25-1841 (FAX)0853-21-6617

(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp

http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料 / 無料

●開館時間 / 9:00~17:00 (入館は16:30まで)

●休館日 / 火曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始